

# なぜ今、「蟹工船」か

永野 勇気 大学生

近頃、小林多喜二の「蟹工船」がブームになっています。どこの書店に行っても、特設の棚に「蟹工船」やその関連書籍が平積みになれ、テレビや新聞もこの本をテーマに様々な特集を組み、さらには海外メディアからも注目されています。

「蟹工船」が書かれたのは、今から七十年以上も前の1929年です。そのなかで描かれているのは、劣悪な条件のもと、過酷な労働を強いられ、「搾取」される労働者の姿です。その「搾取」の様子は恐ろしく、醜く、そして何より野蛮なものです。暴力と権力で労働者を屈服させようとする「現場監督」、国民を守るどころか弾圧する国家。あまりに無秩序で、前近代的です。なにせこの作品は、繰り返しますが七十年以上も前の作品。明治憲法下の当時の日本において、労働者の人権保障など、不十分もいところでした。

さて、では立憲主義を基礎とし、民主主義的な国家として大変な発展を果たしたはずである現在のこの国において、右のようなことはもはや笑い話になってもおかしくないはずです。

ところが、どうやら実際はそうではないようです。今のこの「カニコウ」ブームを支える二十代〜四十代の人々は、作品のなかの登場人物に、自らの姿をオーバーラップさせています。事実、インターネット上でも、「狭い船内の中にギョウギウに労働者たちが入れられる様子は、満員電車に乗って通勤するサラリーマンの姿を思い出させ、過酷な労働は、過重な残業と重なる」と書く人など、自分の生活と作品の世界を重ねている人は少なくありません。

どうしてこの「蟹工船」という作品が、「過去の現実」としてではなく、「今まさしく、目の前にある現実」として読まれているのか。その二つの現実の重なりは、例えば作品のこのようなシーンで具体的に現れています。

作品の中で、ある漁師が言います。

「周旋屋に引つ張り廻されて、文無しになってよ。また長げえこと、くたばるめに合わされるんだ。」

ここで言う「周旋屋」とは、雇い主と求職者の仲介を生業とする者、つまり今で言えば派遣業者にあたります。

戦前には「周旋屋」のほかに、「口入れ屋」「人貸し業」と呼ばれ、そういったものはヤクザなどが行う裏の仕事でした。そのため、戦後になってそれらの事業は法律によって禁止されました。ところが、八六年には専門的な十三業務に限り人材派遣を認める「労働者派遣

法」が施行され、九六年には対象業務を二十六業務に拡大。九九年には製造業を除き原則自由化、〇四年にはその製造業も解禁され、さらに〇七年にはその派遣期間が上限三年まで拡大しました。

「蟹工船」のなかでは、「周旋屋」(派遣会社)というものが、労働者を不当に搾取するための仕組みの一つであることを、さきほどのセリフは表しているように思えます。しかし、労働者の権利が労働三法などによってきちんと保障されているはずの現在と、そういったものが明らかに不十分であった当時の様子を安易に重ねてしまうことにはやはり無理があるのではないかと考える方も当然いらっしゃるはずです。そこで、「現在の」派遣事業がもつ問題点を、少々具体的に分析してみたいと思います。

労働者派遣事業が持つ問題点には様々なものが考えられます。まず、派遣事業そのものを成り立たせているシステムである、「ピンハネ」の問題です。これは実質上の中間搾取です。登録している派遣会社によって派遣された労働者は、派遣先の職場で、その労働者と同じように歴とした「労働」を行います。ところが、他方で派遣会社が行ったことといえば、ただ派遣先に人を送っただけ過ぎません。「職の紹介料」と考えると、いかにも正当な理屈に見えますが、つい最近倒産して話題になった「グッドウィル」の「データ装備費」の例に見られるように、意味不明な天引きが行われることもありますし、そしてなにより、そういった役割は本来ハローワークなどの機関において無償で果たされるべきものです。また、職が安定しないためにスキルを身につけることが不可能になり、常に「素人」の状態であるざるを得ないという問題や、「一日ごと」に無職になる「日雇い派遣の問題など、挙げていけばキリがありません。

九九年の法改定により、派遣可能な対象業務を原則自由化したことで、派遣業はそれ自体が魅力ある事業へと変貌しました。九九年には一万三〇〇〇件程度だった事業者数は、〇五年にはほぼその三倍の数に膨れ上がりました。その結果、同年の調査では派遣労働者数は二五五万人にものぼることが判明すると共に、派遣業界の年間売上高は四兆円という驚くべき数値を叩き出したのです。

最近になって、派遣社員となった人々がどんな働き方をしているのかは、様々なメディアで大きな問題として取り上げられるようになってきました。なかには、到底人間的とは言えない、まさしく「蟹工船」そのままの扱いを受けているような労働者もいます。特にひどい事例が報告されている日雇い派遣に関しては、規制緩和を続けてきた当事者である与党(自民党)も、さすがに禁止せざるを得ないような状況になっています。

ここまで派遣事業のみに焦点をあててきましたが、実態を本質的に理解するためには「非正規雇用の増大」という問題にも目を向けなければなりません。労働者全体のうち、現在では三分の一が非正規雇用であり、同じ仕事をしているにも関わらず、正社員との間に大き

な待遇格差(具体的に言えば賃金格差が主なものです)が生じています。再び「蟹工船」から引用したいと思います。それはこんなシーンです。

物語の主な舞台となっている博光丸は、いくつもある蟹工船の中の一つです。それらは常に同業者の他船と収穫高を争い、蹴落とし合っています。ある日、博光丸の現場監督は、自分たちの船が他船に比べ、収穫高に出遅れが生じているという知らせを受け、焦り始めます。そこで、彼はある策を講じました。それは、「船員」と「漁夫、雑夫」を仕事の上で競争させ、勝った組には「賞品」を、働きの少ない者には「焼き(焼いた鉄棒を身体に当てるというもの)」を与えるというものです。本来、痛みを共有することができるはずの労働者たちは、それによって争い合い、敵対し、分裂させられます。

こうした構図は、先に記したような「非正規社員」と「正規社員」の関係に当てはめることが可能です。つまり、安い賃金で正規社員と同等、あるいは同様の仕事をこなすことが要求される非正規社員は正規社員を敵視するようになり、そうされた正規社員は当然彼らに好意的な感情をもつことはまずなくなります。

さらに、この構図が当てはまるのはなにも「非正規」と「正規」の関係だけではありません。過度な成果主義による、つまりは「正社員」どうしの競争からもこの構図はみてとることができます。職場内が、「弱肉強食」的な戦場と化すのです。

作品のなかで、右のような策略によってこのような状況を生み出すことに成功した現場監督は、ビールを飲みながら「他愛ないものさ」と労働者たちを嘲笑します。右のような構図を生み出すことで、一番得をするのは一体誰なのか、ここでは端的に示されています。つまり、いつも「下」のほうで「勝手に潰し合っている状況」は、この現場監督のような「上」の者(本質的には彼も「下」の人間と言えますが…)に不当な利益を与えるのです。

この作品の最後は、決死のストライキが失敗し、一度は敗れた労働者たちが、「もう一度」立ち上がるというところで締め括られています。今まさに過酷な労働に苦しみ、それぞれがバラバラにされ、ひたすら絶望と閉塞感に浸っている人々にとって、このシーンは当然大きな希望になり得ると感じます。

実際、現在このようなひどい現状にたいして抗議の声が各地で上がり、労働組合も以前に比べて活性化し始め、また何より二十歳から四十歳までの比較的若い世代の間にも運動が広がっていることは注目すべき点です。

ところで、一部ではこれらの運動の高まりを、「若者たちの左傾化」とみなし、なかにはそれに対し強い拒否感を露にする人もいます。たしかに、自分たちを取り巻く、閉塞した

現状を打破していこうというとき、その手段として、左翼的思想による理論武装はある程度必要になることがあるのも事実です。

しかしながら、そういった運動の根源を成しているのは、あくまで、本当に日々の生活を生きるのにも苦勞するほどの「貧困」に対する抗議であり、「社会主義革命の成立」のときイデオロギー的なものとは大きく異なります。また逆に、そういった強固なイデオロギー的な支柱を持たないことを批判し、「パーチャルな左翼思想」として危険視する意見もあります。そもそもこの運動を支えている目的がイデオロギーではなく、極めて単純な「プロテスト」である以上、この指摘にはどうしても違和感を抱いてしまいます。実際、昨今の労働問題に熱心に取り組み、大きな注目を浴びている、作家であり活動家でもある雨宮処凛さんも、そのような「若者の左旋回」論的な意見に対して感じる違和感を度々口にしています。

現在において、冷戦中の時代に行われていたような、「イデオロギーの二項対立を前提として、世の中に生じる諸問題を解決する」という運動プロセスには、もはやリアリティーがありません。現実には、若い世代はそういったイデオロギー的色彩の濃いものには強い拒否感を持ち、どちらかという距離を置きたがるようになってきています。

したがって、現在みられる抗議運動の高まりを「左傾化」という観点で語ることは、それほど大した意味はないように思われます。さらに言えば、こういった労働の問題というのは、先に述べた「派遣」や「非正規」の実情からわかるように、イデオロギー云々を越えて共有が可能なというより共有が不可欠なものであることは明らかです。その点から言えば、そういった「若者の左旋回」論のような議論は意味がないどころか、現実的な問題解決にとって大きな弊害となり得るのです。

さて、この文章の題は「なぜ今、蟹工船か」というものでした。つまるところ、なぜ今ここまで「蟹工船」がブームになっているのかという点、それほどまでに、昨今の労働問題は深刻化しているということ。もはや「自己責任論」だけでは片付けられないような、「生きるか死ぬか」の問題にまで発展しているということ。です。

ですから、企業寄りの方がしばしば言っているような、「派遣の問題も、非正規の問題も、国際競争に勝ち抜くためには仕方がない痛みなのだ」というような議論に飲まれてはいけません。このような議論にしても、先ほど述べたような「イデオロギー」的議論にしても、現実には「このままでは生きていけない人」を救済するにあたっては、全くもって不毛だからです。現時点で、私たちにとって最も必要なことは、「生きるか死ぬか」という、先進国には有りにえないようなこの異常な事態が存在する、現在の日本社会の現実を直視することです。そして、そのなかで感じた矛盾には声を上げなければなりません。しかし、一人ではどうしても限界があります。だからこそ、団結してともに声を上げることには大きな意義と、

必然性があるのです。少なくとも今の労働者たちにとって、「蟹工船」のもつメッセージは  
そういったものなのではないでしょうか。